平成２５年度　　１年間の歩み　レポート

所属校	熊谷市立富士見中学校	職名	教諭	氏名	浅沼勇弥

「一人一人が生き生きと活動できる学校生活のあり方
～個別の指導計画による指導の充実～」

今年度、「**平成２５年度埼玉県小中学校特別支援学級等教育課程研究協議会**」で提案する機会をいただき、富士見中学校の教育課程について提案してきました。そこで、たくさんの先生から、感想や意見、指導者から指導助言をいただきました。夏の研修会で、報告させていただきましたが、あゆみに残したいと思いまして、一部、修正し、１年間の歩みのレポートとしたいと思います。

児童生徒の生活に結びついた効果的な指導計画の工夫
～個別の教育支援計画、個別の指導計画との関連を踏まえて～

１　本校の特別支援学級の現状について

本校には特別支援学級は３学級、１３名の生徒が在籍している。自閉症・情緒障害特別支援学級が２学級、５名の学級と４名の学級、知的障害特別支援学級が４名の１学級である。教員数は特別支援学級の主任と各学級担任の計４名である。市費対応の特別支援学級支援員が３名、週４日５時間勤務している。また、本校には通級指導教室があり、２名の教員と３名の支援員がいる。年度途中で、通常学級から通級指導教室、特別支援学級にくる生徒も多く、連携をとりながら指導を行っている。

２　個別の教育支援計画、個別の指導計画について

個別の教育支援計画・個別の指導計画は、個々の生徒の障害の状態や発達段階など的確な実態把握を基に、指導目標及び指導内容を明確にして作成する必要がある。個別の教育支援計画・個別の指導計画を充実させることが効果的な指導計画の工夫につながると考える。作成していくなかで大きく見えてきたことは、以下の３つである。

・羽生ふじ高等学園、さいたま桜高等学園、普通高校を希望する生徒が多い
・体の緊張が強い、コミュニケーションや集団活動が苦手でリラックスできない
・基本的生活習慣が確立されていない。

この３点を踏まえ、今年度の時間割を作成した。

●時間割　　（変更前）

月	火	水	木	金
生単	生単	生単	生単	生単
自立	自立	自立	自立	自立
作業	**作業**	美術	**作業**	総合
作業	**作業**	美術	**作業**	総合
国語	数学	英語	数学	国語
体育	体育	技家	社会	体育
	理科	技家	音楽	学活

（変更後）

	月	火	水	木	金
1	日生	日生	日生	日生	日生
	自立	自立	自立	自立	自立
2	作業	技家	美術	生単	総合
3	作業	技家	美術	生単	総合
4	国語	数学	国語	数学	国語
5	体育	体育	数学	社会	体育
6		理科	英語	音楽	学活

３　児童生徒の生活に結びついた効果的な指導計画の工夫について

・時間割の変更

生活単元学習や作業学習中心だった時間割を自立活動や教科（国語・数学・理科・社会）学習を多く取り入れ、普通高校受検にも対応できる指導計画とした。

・日常生活学習の授業内容の工夫

朝の会を行い、１日の見通しを持つ。生活習慣チェックシートを記入し、家での生活について指導する。職員室へ朝のあいさつに行くことで、コミュニケーション能力の向上を図る。

・自立活動の授業内容の工夫

曜日ごとに担当の教員が変わり（４人の教員でそれぞれ担当する)、ストレッチポール、体つくり運動、群読等を行っている。ストレッチポールは、「心身のリラックス」「体のゆがみの修正」「硬くなった間接をほぐし、可動域を広げること」「バランス機能の向上」などの効果がある。カーテンを閉めて、外光、物音を遮断し、目を閉じ、ゆったりとした音楽を流しながら、教師の言葉に耳を傾け、体の力を抜いて、ゆっくり体を動かす。ボディーイメージ、指示理解、集団行動、人間関係（コミュニケーション）等、課題のある生徒に対して効果的である。体つくり運動では、マラソンやボール運動、縄跳び、空手など生徒の興味関心の高いものを中心に取り入れた。

・作業学習の授業内容の工夫

挨拶や報告、返事、コミュニケーション、働くことの厳しさや充実感、達成感、安全、清潔、正確に作業を行うこと、長い時間継続して行うこと、このねらいを達成するために作業学習で「唐辛子の加工」を行っている。１年間を通じて、唐辛子の栽培から収穫、生産（汚れふき、きざみ、すりおろし、選別、計量、袋詰め、ラベル貼り)、販売と様々な学習があり、生徒の自主性を育て、自己肯定感を高めることができる。この作業学習に取り組むことにより、生徒一人一人の将来の職業生活や社会自立を目指し，生活する力を高めることができる。

４　今後の課題

教科学習を多く入れたことで、実態差の大きい生徒集団のため、授業を行っていくことが難しかった。高校受検を考えている生徒に対しては、この教育課程（時間割）では物足りなく、普通高校受検にまったく対応できず、中途半端になってしまった。また、特別支援学校を希望している生徒に対しては、生活単元学習や作業学習など、領域教科を合わせた指導の大切さをしみじみと感じた。

社会で生き生きと生活していくために、今現在その生徒にとって必要なこと、障害のあるなしに関わらず、生徒の将来を考え、生徒のニーズにあった教育課程を柔軟に編成していく必要がある。そのためには特別支援学級だけの授業では限界がある。通常学級の授業では自分の学年ではなく、その子の実態に会った学年授業を受けられるシステム、通級指導教室との連携、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級と分けるのではなく、ニーズにあったクラス編成、それが実現できる教員の確保など学校全体で支援を行っていかなければいけない問題である。進路についても保護者本人と１０年後、２０年後を考えた進路選択について考えていかなければならない。そういった意味でも、将来の生活に結びついた教育計画を工夫しなければならない。